

修学院離宮

Shugakuin Imperial Villa



修学院離宮の歴史

修学院の名は、10世紀後半ここに修学院という寺が建立されたのが始まりであった。南北朝時代以後この寺は廃絶したが、地名は修学院村として残った。修学院離宮は、桂離宮におくれること30余年、明暦元年から2年（西暦1655～1656年）にかけて後水尾上皇によって造営工事が起こされ、万治2年（1659年）頃に完成した山荘である。離宮の造営より早く上皇の第一皇女梅宮が得度して、現在の中離宮付近に草庵を結び、円照寺を創建されていたが、早くから別荘としての適地を探しておられた上皇は円照寺を大相の八幡に移し、上と下の二つからなる御茶屋を建設した。幕府との間に緊張が続いた時代であっただけに、短期間にこれほど大規模な山荘を造営し得たことは一つの驚異でもある。中の御茶屋は創建当時の山荘にはなかったものであるが、上皇の第八皇女光子内親王（朱宮）のために建てられた山荘に東福門院（後水尾上皇の皇后、將軍徳川秀忠の娘和子）亡き後の女院御所の建物を一部移築して拡張した。上皇崩御の後、光子内親王は落飾得度してこれを林丘寺となされた。明治18年（1885年）林丘寺門跡から境内の半分が楽只軒、客殿とともに宮内省に返還さ

れたので、離宮に編入したものである。昭和39年（1964年）上・中・下の各離宮の間に展開する8万㎡に及ぶ水田畑地を買い上げて付属農地とし、景観保持の備えにも万全を期して今日に至っている。

概説

比叡山の麓、東山連峰の山裾に造られた修学院離宮は、上・中・下の三つの離宮（御茶屋）からなり、上離宮背後の山、借景となる山林、それに三つの離宮を連絡する松並木の道と両側に広がる田畑とで構成されている。総面積54万5千㎡を超える雄大な離宮である。明治期に宮内省の所管となるまでは離宮を囲む垣根も全周にはなく、自然に対して開放された山荘であった。

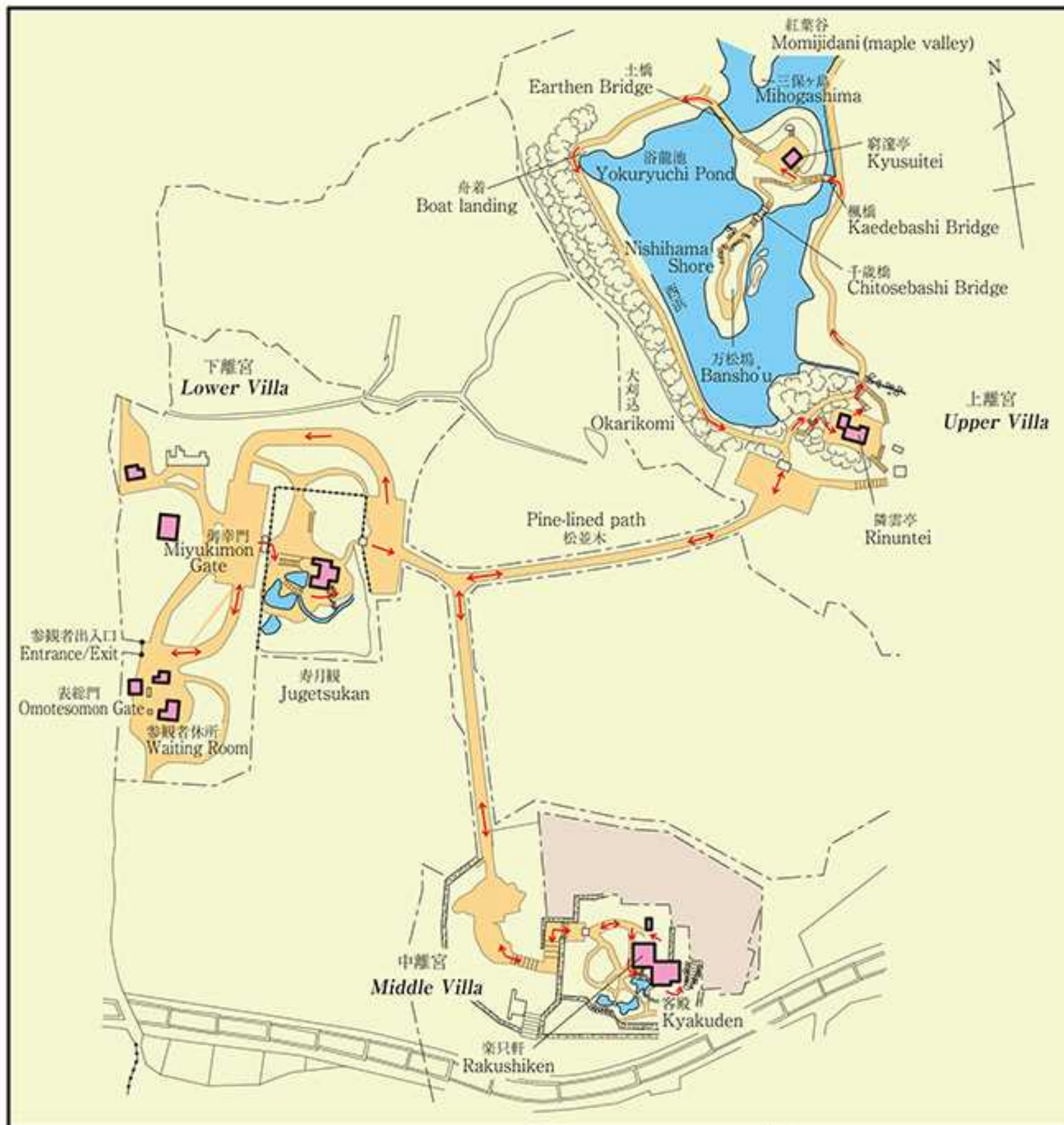
下離宮には、創建時では最大の建物の彎曲園があったが、比較的早い時期に失われ、今は南を庭園に囲まれた寿月観が残っている。中離宮には、楽只軒と客殿があり、やはり南に庭がある。上離宮は、修学院離宮の本領であって、谷川をせき止め浴龍池と呼ぶ大きな池を中心にすえた回遊式庭園となっている。その浴龍池を一望におさめる東南の高みには隣雲亭、中島に窮達亭がある。山麓に広がる離宮のため上と下の離宮の標高差は40m近くあり、大小の滝に加え水流の早い小川もあり、どこにいても絶えず水の音を聴くことができる。昔は畦道にすぎなかった松並木から眺める風景もまたすばらしい。

京都御所、京都大宮御所、京都仙洞御所、桂離宮とともに皇室用財産（国有財産）として宮内省が管理している。

このパンフレットは、宝くじの社会貢献広報事業として助成を受け作成されたものです。



■修学院離宮 略図



このパンフレットは、宝くじの社会貢献広報事業として助成を受け作成されたものです。



発行 公益財団法人 菊葉文化協会
写真・資料提供 宮内庁